

# DAVID ROW

# デイビット・ロウ

---

## モノタイプ

1991年3月30日(土)→4月6日(土)  
フジ美術館モダン

## A SILENT TABLEAU

"When we concentrate on a material object, whatever its situation, the very act of attention may lead to our involuntary sinking into the history of that object. Novices must learn to skim over matter if they want matter to stay at that exact level of the moment. Transparent things, through which the past shines."

**Vladimir Nabokov**

Near Constantine Brancusi's "Table of Silence" is Brancusi's "Endless Column", and, like Brancusi, David Row takes a segment (a part) of an infinite continuum so as to have the possibility of open-ended solutions. Mr. Row's forms, having this geometric quality of Brancusi, may confuse us at first as his resultant objects appear as an illusion on a two-dimensional picture plane... a surface illusion yet anything but a surficial illusion. He employs fragments, containers of infiniteness, to reinforce the "wholeness" of his ideas. In the act of his painting, he uses cancellation (painting out) both as "the possibility of removing" to retrieve a remembered essence and "the possibility of moving forward" toward "the arrested center" from which emanates all essences. As one sinks through his physical plane, one sees an on-going history within his surfaces, the "spoor" of his journey, drawn out through his materials of woodblock, paint, and paper. Beneath this skin, stretched over the corpus of his thinking, are the reflections of his comings and goings.

David Row's monotypes are made of the stuff of shadows, metaphysical shadows, such as we find on the wall of Plato's cave in *The Republic* (the cave of man's consciousness).

Picasso, when queried about the meaning within his "Guernica", responded, "If I could say it in words, why would I paint?" Matisse advises, "If one would be a painter, the first thing one should do is to cut out one's tongue!" Now, perhaps neither you nor I are a painter, and we seek an articulation beyond Mr. Row's visual language. Some of us will find meaning through metaphysics. others may find themselves in the dichotomous silence between "being" and "non-being" (and David Row reads Samuel Beckett). For others, meaning may be found in the alchemy of paint and material forged on the platen of the monotype press, growing feet, walking out to greet them in silence, Mr. Row's tableau of silence... Nabokov also warns us in his novel, *Transparent Things*, "A thin veneer of immediate reality is spread over natural and artificial matter, and whoever wishes to remain in the now, with the now, on the now, should please not break its tension film."

**Garner H. Tullis**  
January 28, 1991

## 沈黙のタブロー

「有形のオブジェに注目を集中してジッと目を凝らすうちに、その時の状況とは関わりなく、私たちはオブジェが持つ歴史にまで引き込まれていく。対象物をその瞬間のレベルにとどめておきたいと思う初心者は、オブジェの表面だけに軽く目をやる術を学ばなければならない。過去の輝きを通す透明なる物よ」

ウラジーミル・ナボコフ

コンスタンチン・ブランクーシの二つの作品「沈黙のテーブル」と「無限の柱」は互いに近い関係にある。ブランクーシに似て、ディビッド・ロウも無限の連続性のなかから一断片を摘出し、それに融通無碍な解答を与える可能性を示している。ロウ氏のフォルムはブランクーシと共通する幾何学的な性格をっており、初めて出逢う人は戸惑いを覚えるかもしれない。彼のオブジェは、二次元の平面に描かれた幻想のように見える。しかし平面に描かれた幻想でありながら、けっして平板ではない。

ロウが使う断片は無限性を内包しており、その断片が彼の思想の「全体像」を補強している。絵を描くという行為のなかで彼は消去法を駆使し、「消却の可能性」を暗示するとともに記憶の世界から本質を呼び戻し、すべての本質の根源である「中心部」に向かって「前進の可能性」を暗示するのである。

作者の物理的平面の下の世界に入っていくと、そこには日々の営み、人生遍歴の「足跡」が木版、絵の具、紙などの素材に刻み込まれているのに気づく。作者の全思想を覆っている皮膚の下には、彼の営みが凝縮されている。

ディビッド・ロウのモノタイプは翳り、形而上的な翳り、あたかも『国家』の中のプラトンの洞穴（人間の意識の洞穴）の壁にも似た翳りを思わせる素材で構成されている。

かつて『ゲルニカ』のもつ意味を問われたピカソは、「言葉で表現できるくらいなら、なぜ絵を描く必要があるのか」と答えた。「絵を志すものは、まず舌を切り捨ててしかるべきだ」と語ったのはマチスである。その意味では、おそらく私たちも画家とはいえない。それゆえ、ロウ氏の視覚言語の奥に真のコトバがあるのではないかと探し求める。形而上学によって、その意味を見出す人もいるだろう。「存在」と「非存在」との二律背反の沈黙のなかに自分自身の姿を発見する人もいるだろう（ロウはサミュエル・ベケットの愛読者である）。あるいは、モノタイプ・プレスローラーから生まれる絵の具と素材との錬金術のなかに意味を求める人もいるだろう……。その意味が足を伸ばして歩き出し、見る人々を沈黙のうちに迎えてくれる。ロウ氏の沈黙のタブローだ。

ナボコフは小説『透明なもの』のなかで、私たちに警告を与えている。「いまの現実が薄い皮膜となって、自然の物質と人工の物質を覆い隠している。現在の中であって、現在とともにあり、現在を生きようとする人よ、どうかこの緊張の皮膜を破らないでほしい」と。

1991年1月28日

ガーナー・M・タリス





1990 / 172.7 × 108.0cm



1990 / 172.7 × 108.0cm



1990/172.7×108.0cm





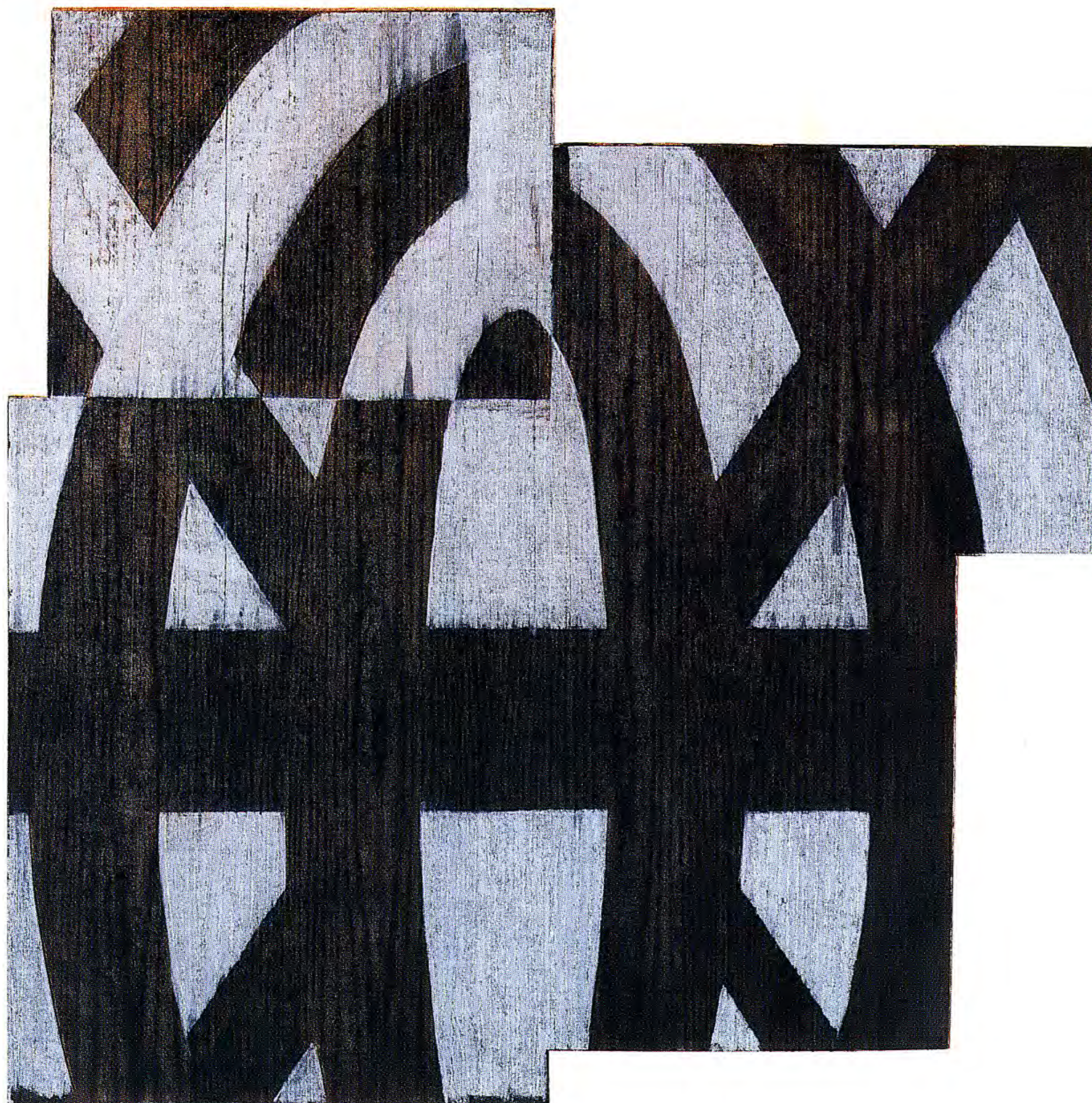
1990 / 172.7 × 108.0cm



1990 / 122.0 × 102.9cm



1990 / 122.0 × 102.9cm



1990 / 122.0 × 102.9cm



1990 / 172.7 × 108.0cm

## デイビッド・ロウ

### 学歴

- 1968-1972年 コネチカット州イエール大学  
1972-1974年 コネチカット州イエール大学修士課程終了

### 個展

- 1974年 イエール大学、コネチカット  
1977年 ラットガー大学、ニュージャージー  
1981年 アート・ギャラクシー、ニューヨーク  
1982年 ニューヨーク州立大学、ニューヨーク  
1984年 55 マーサー・ストリート・ギャラリー  
1987年 ジョン・グッド・ギャラリー、ニューヨーク  
1988年 アスカン・クロン・ギャラリー、ハンブルグ、西ドイツ  
1989年 ジョン・グッド・ギャラリー、ニューヨーク  
1990年 パメラ・オーチンクロス・ギャラリー、ニューヨーク

### グループ展

- 1982年 「アメリカの新しいドローイング」、ドローイング・センター、ニューヨーク：サットン・プレイス、ギルフォード・サリー、ニューヨーク  
1983年 「アメリカの新しいドローイング」、近代美術館、カリフォルニア：ペサロ・ヴェニス、イタリア  
「ジェネラル・エレクトリック、ウインター・ドローイング・ショウ」、ジェネラル・エレクトリック本社、スタンフォード、コネチカット  
1985年 メイン・ビエンナーレ、ポートランド美術館  
「イメージ・アブストラクト」、ルーハウス、ニューヨーク  
1986年 「ナット・フラット」、ピラミッドクラブ、ニューヨーク

「ニューヨークの12人」、イエール美術学校、コネチカット

「ウィリアム・バジオット、ジョージ・ネグラポント&デイビッド・ロウ」、ジョン・グッド・ギャラリー、ニューヨーク

「インヴィテーション」、コンテソ・ロウラー・ギャラリー、ニューヨーク

「ファウンデーション・ファキュルティ」、プレート・インスチチュート・ギャラリー、ニューヨーク

1987年 「スチミレーション」、ジョン・グッド・ギャラリー、ニューヨーク

「ロマンチック・サイエンス」、ステファン・ウエストフォール企画、ワン・ペン・プラザ、ニューヨーク

「ソリッド・アブストラクション」、ソール・オストロウ企画、サクソン・リー・ギャラリー、カリフォルニア

1988年 「トム・ビルズ&デイビッド・ロウ」、ジョン・グッド・ギャラリー、ニューヨーク

「サイティングス」、北米研究所、バルセロナ、スペイン

ポール・ケイバ・ギャラリー、ペンシルヴァニア

アクミー・アート、カリフォルニア

1989年 「モノタイプ、ガーナー・タリス工房から」、パーソンズ/リンデル・ギャラリー、ヘルシンキ、フィンランド

「モノタイプ、ガーナー・タリス工房から」、パメラ・オーチンクロス・ギャラリー、ニューヨーク

1990年 「モノタイプ、ガーナー・タリス工房から」、ガーナー・タリス、東京アート・エキスポ、東京

## あとがき

昨年、アートエキスポで私はふたりの画商（ディーラー）と知り合いになった。その一人がガーナー・タリスさんである。会場の私の店から少し奥に歩いたところにタリスさんの店が出ていた。入口の左手にサム・フランシスのモノタイプがかかっていた。群青色の地に鮮やかな赤や黄や緑色の破片が乱舞していた。私はその激しい情熱に魅きつけられて店に入った。とそこに頬髭の白い、眼鏡を掛けた人が立っていた。私は心持ち会釈して壁の絵を眺めた。サム・フランシスには売約の印が付いている。右奥に力強い印象の絵がかかっている。太い梯形が双方から噛み違うような形を薄い墨色で濃い黒地の上に抜いている。梯形は版木を使ったらしく強いムーブマンを秘めていた。もう一枚は同じ形を黒地に同じ形を黄色で抜いてあった。簡潔な形と背後（バック）の黒が映え合って実に神秘的に見える。薄墨の形の上には墨の飛沫が散って古い時代の石摺りを見るようであった。大胆で強烈なデザインは見たところ山口長男の作品と一脈通じるものがあった。「この作家は……」、「ディビッド・ロウ」その中年の人は私を見詰めて一語一語区切るように言った。私も彼の口元を見ながらそれにまねて発音し、終わったところで「ディビッド・ロウ」と少し早口に繰り返した。快心の

笑みを浮かべた彼は掌を差し出した。太いごっつい掌だった。握り締められて「あっ」と声が出そうになった。「画題（タイトル）？」「ありません。」私は山口長男を連想した。あの山口の画面は何を表現したものだろうか。只真四角長方形斜形という具合に無愛想な画題が付いている。黒い地色に黄土色の油彩を平に盛り上げて平面的な幾何形が塗り重ねてある。黄色の部分はよく見ると薄く面が取ってある。また黄色を切り裂くように黒い線のような面が食い込んだりしている。描いた人はどういう意図で描いたか解らなかったが、只その形からは寂かな安定感が感じられ、古い庭の石でも見ているような心の安らぎが感じられるのであった。また色の面と面が互いに響き合っている。だがディビッドの形は山口の寂けさとは違って多分に意志的なものであった。「オイル・オン・キャンバス？」「ノー、モノタイプ・オン・ペーパー」という返事だった。モノタイプというのは一枚刷りの版画である。版画の技法は使ってあっても作品は只一点しかない。版画とはいってもオリジナルである。ガーナーさんはニューヨークのソーホーの近く（ホワイト・ストリート）でモノタイプのスタジオを持っている。そして何人かの画家が彼のスタジオを使って仕事をしている。サム・フランシ

スもその一人であった。もちろんディビッド・ロウもタリスさんのスタジオを使っている。「モノタイプは私が販売の権利を持っています。」とタリスさんは言った。サム・フランシスのモノタイプは殆どガーナーさんのスタジオで制作されている。サムはタリスさんの古くからの親しい友である。タリスさんは若い頃ペンシルヴァニア大学の大学院美術科に学んだ。当時この大学院に招聘された教授はマーク・ロスコ、ロバート・マザーウェル、バーネット・ニューマン、ディビッド・スミス等、アメリカ現代美術の第二世代の黄金時代を築いた作家たちであり、今日から見れば目のつぶれそうな錚々たる陣容であった。若き日のタリスさんはこの素晴らしい作家たちの影響を受けて育った。そして卒業後、カリフォルニアのバークレー大学やその他の大学の教授も務めた。

「そこで学んで貴方の最も印象の深かったことを教えてください。」「画家達も若く私達も若く、ふり返って見ると実に素晴らしい青春を送ったと思います。教師と生徒というより親しい仲間という感じでした。彼等の作品を通してディスカッションするのです。そういう時何かのことでニューマンが私達に『君たち、耳で聞いたことより、自分で見たことの方を信

じなさい。』と言ったのがひどく心に残りました。ともすれば人の評価に頼り勝ちな私達に、自分の眼で見た感性をもっと大切にしろというこの一言はその後永く私の心に残っています。」タリスさんはその後制作する仕事から作家を育てる方に転じた。数年前に結婚した夫人のパメラさんの画廊の仕事に役立つと思ったからである。

昨年の春私はニューヨークに行った時、タリスさんの工房を訪問し、そこでディビッド・ロウにも会った。そして今回の展覧会の約束をした。力強く簡潔なロウのモノタイプは今後も日本で沢山の知己と支持者を得るであろう。黒を地にした簡潔な形の力強い実在感が心に喰い込んでくる。古い石拓を見るような永遠な感じで……。

1991年3月

藤井一雄

デイビット・ロウ  
モノタイプ

---

1991年3月30日(土)→4月6日(土)  
フジキ画廊モダン

発行/フジキ画廊  
東京都中央区銀座6-5-10  
Tel.03-3571-0095

制作/株同美印刷

*FUJII Gallery*